

國學院大學學術情報リポジトリ

宮崎安貞『農業全書』における「三才」思想

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學大学院文学研究科 公開日: 2025-05-21 キーワード (Ja): 三才思想, 宮崎安貞, 農業全書 キーワード (En): the Sancai Thought , yasusada miyazaki , nogyo zensho 作成者: 饒, 建平 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001638

宮崎安貞『農業全書』における「三才」思想

The “Sansai” Thought’ in yasusada miyazaki’s *nogyo zensho*

饒 建 平

キーワード：三才思想 宮崎安貞 農業全書

Key Words: the Sancai Thought yasusada miyazaki *nogyo zensho*

要旨

三才思想は古代中国に起源を持ち、天・地・人の三つの要素で構成されており、古代の思想文化に深い影響を及ぼした。『農業全書』は日本で最も早く出版された農書であり、古代中国の思想の影響を受けている。この書籍の内容には、三才思想に関する多くの論述が見られる。『農業全書』によると、天には時を授けることや農業の源という二つの意味があり、また「地」の利用についても頻繁に強調されている。「人」は「人和」と「人力」の二つの要素に分かれており、これらの要素を通して天と地を活用して農業を行うことが三才の道であるとされている。

Abstract

The Sancai Thought originated in ancient China and consists of the three elements of heaven, earth, and human beings, having had a significant influence on ancient thought and culture. The *Nōgyō Zensho*, the earliest agricultural book published in Japan, was influenced by ancient Chinese thought, and its content contains numerous discussions on the Three Powers Thought. According to the *Nōgyō Zensho*, ‘heaven’ has two meanings: the giving of time and the source of agriculture. The book also frequently emphasizes the utilization of ‘earth.’ As for ‘human beings,’ it is divided into the two elements of ‘harmony among people’ and ‘human labor.’ The book asserts that the way of the Three Powers lies in utilizing both heaven and earth through these two elements.

はじめに

宮崎安貞(1623年-1697年)は、江戸時代前期の農学者で、大蔵永常・佐藤信淵とともに江戸時代の三大農学者と称されている。著書は『農業全書』⁽¹⁾の1冊だけ

(1) 本論文で使った『農業全書』の引用は、『日本農業全集 第12巻』(農山漁村文化協会1978年版)、『日本農業全集 第13巻』(農山漁村文化協会1978年版)による。

であるが、その内容は明治以前の最高の農書と評価される。『農業全書』は元禄10年(1697)京都の新興書堂柳枝軒から刊行された。中国徐光啓の『農政全書』⁽²⁾などを参考にしつつ、自ら近隣諸国の農業を観察し、経験豊かな農民たちから取材し、体験による検証を加えて『農業全書』を完成した。『農業全書』は、各地域の百姓に刺激・啓発を与え、地域独特の自然条件・社会条件を認識させ、それに適応する農法を模索し、地域農書を著す契機となる点で、より大きな意義を持っている⁽³⁾。

いわゆる伝統的な農学思想は、古代の農民が長期的な農業生産活動の中で農業技術の経験を蓄積することによって形成された理性的な考え方であり、具体的に伝統的な農学の哲学原理と農耕原則に現れる。それはまた伝統的な農業技術と相互に影響を与え、伝統的な農業社会の発展を支えてきた。日本近世の農学思想は、特定の自然環境や江戸時代の社会制度に源を発し、また長期的な農業生産の実践や中国の伝統的な農学思想の影響を受けながら発展してきた。

一、天

古代において、「天」に対する人々の理解は限られていて、一般的に「天」の最も基本的な本質と特徴は「時序」という形で現れるものと見なされていた。そのため、人々は頻繁にこの要素を「天時」と呼んでいた。農業生産の視点から「天時」を考えると、これは「農時」と呼ばれることとなる。また、『農業全書』での天は「神」のような形而上的な意味も含まれている。

(一)「天」——授時の要

授時について、「然る故に、いにしへ代々の、聖王、賢君、民に時を授け、時節をしらしめ、農事の時に違はざるやうを、専示し給へりと古き文にも見えた

(2) 『農政全書』は明の学者徐光啓が編纂した総合的な農業著作である。『農政全書』は明の万暦年間に成立し、崇禎12年(1639年)に出版された。本書は農地の水利、作物の栽培、農具の改良、牧畜、林業などの分野を網羅し、中国古代農業科学技術の集大成と評価されている。全書は伝統的な農業技術と経験を体系的に総括しただけでなく、一部の西洋の科学技術思想を取り入れ、徐光啓の科学と実践の実務精神を体現し、明清時代の農業の発展を大きく推進し、後世に深い影響を与えた。

(3) 木村茂光、『日本農業史』、吉川弘文館、2010、P167。

り」⁽⁴⁾と示したように、農民に時期を教えて、耕作の適期を間違えないことは古来のことである。『農業全書』では「四時各其つとめあり。十二ヶ月をのく々宜しきあり。時節に先立てうゆれば早過て生ぜず。又時節にをくれて種れば晩くして実のりうすし」⁽⁵⁾と述べた。つまり宮崎安貞にとっては、農業生産には独自の法則があり、その中で季節性が特に強調される。

現代の農学の視点から見ると、農業生産はオープンシステムであり、植物栽培における各種の作物の種まき、管理、収穫、養殖における畜産動物の繁殖と飼育など、すべての農作業は季節や時機に制約される⁽⁶⁾。各季節にはそれぞれの労働内容があり、12ヶ月すべてに適した農業生産活動がある。耕作の時機を逃さない生産は、豊かな食料と衣服をもたらし、国は富み、人々は安定する。自然の法則に反する活動は、自然から罰せられる可能性がある。

さらに、『農事総論』の冒頭で、「それ農人耕作の事、其理り至て深し。稼を生ずる物ハ天也。是を養ふものハ地なり。人ハ中にゐて、天の気により、土地の宜きに順ひ、時を以て耕作をつとむ」⁽⁷⁾と農業の本質を指摘した。宮崎安貞は作物を生み出すのは天であり、育てるのは地であり、人間は気候・季節に従って耕作をつとめるべきだと考えた。

『農業全書』は「凡種芸の事にハ、四季(四季ハ春夏秋冬)、八節(八節ハ、立春、春分、立夏、夏至、立秋、秋分、立冬、冬至也)、二十四節を考て、其時日にをくれず時分々に耕し種るを肝要とするなり。四季八節を用て、月にハカゝるべからず」⁽⁸⁾と述べた。農民は四季、八節、二十四節の変化を考慮に入れて農業活動に従事し、その時節に遅れることなく、時期に応じて耕すことが重要だという考え方は見られる。例えば大麦を植える時期について「又麦をうゆる法。夏至(五月の中也)の後七十日麦を蒔べし」⁽⁹⁾とあり、ふじ豆の撒き時期について「此類の豆うゆる時分の事。三月の節たねを下し、少し土をかけ、死を以ておほふべし」⁽¹⁰⁾ここの「三月の節」は二十四節の中の清明のことである。

(4) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山村文化協会、1978、P81。

(5) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山村文化協会、1978、P79-80。

(6) 楊直民、『农学思想史』、湖南教育出版社、2006、P11。

(7) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山村文化協会、1978、P46。

(8) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山村文化協会、1978、P79。

(9) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山村文化協会、1978、P160。

(10) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山村文化協会、1978、P205。

宮崎安貞の授時観は、中国から伝わってきた暦のほかに、「雑節」の使用にも現れている。日本の暦で二十四節気のほかにも、暦には季節を示す目印がいくつかあり、これらをまとめて雑節と呼び、日本人の生活文化から生まれた日本独自のものである。江戸時代の文献には「雑節」という言葉は存在しなかった、暦に登場するのは明治20年(1887)の暦からである。⁽¹¹⁾ 雑節⁽¹²⁾は日本人によって創造され、同様に二十四節気を補完する役割を果たしている。

『農業全書』では、このような「雑節」の使用がよく見られる。例えば木綿を播く時期について、「又木綿をうゆるに四早くきと云事あり。一にハ春の土用をかけて一日もはやく蒔付るなり」⁽¹³⁾と述べている。秋小豆の播種期を説明する時、「又秋小豆ハ、夏至の後十日過てうゆるを上時とし、土用の入を中時とし、同じく半を下時とす」⁽¹⁴⁾と述べられている。ここでは秋小豆の播種期の中心は夏の土用の入であり、晩限は夏の土用の半ばであることを表した。「八十八夜」を時間の目安とし、それ五、六日以前に播くと、播種の時期が早すぎると考え、一方八十八夜を過ぎた時期は一般の播種期だと見なされる。

『農業全書』の前の農業を論じる農書としては、伊予の『清良記・親民鑑月集』(近世初期)、三河地方の『百姓伝記』(年代不明が、古島敏雄によると、1680年から1683まで⁽¹⁵⁾)会津の『会津農書』(1685年)、紀伊の『才蔵記』(元禄初期)などが挙げられる。これらの農書の中で土用などの雑節が見られるのは、『百姓伝記』だけである。これらの農書は地方で使用される筆写の私家本であり、『百姓伝記』が書かれた三河地方と宮崎安貞がいた中国地方および九州地方との距離が遠いことを考えると、それを普及させるにはかなりの時間がかかる。従って、内容的に直接『農業全書』に影響を与えるとは考えにくい。

宮崎安貞は徐光啓の『農政全書』における農時を分析した。時機に応じた生産を行うことで、農力の損失はなくなり、十分な食糧を得ることができ、食糧による貧困に陥ることはない。農時を正確に理解しても、能動的に農業活動に参加し

(11) 国立天文台(2023)。「雑節とは?」https://eco.mtk.nao.ac.jp/koyomi/wiki/B5A8C0E12FBB_A8C0E1A4C8A4CFA1A9.html。(参考日:2024年2月1日)

(12) 一般に雑節と呼ばれるのは、節分、彼岸、社日、八十八夜、入梅、半夏生、土用、二百十日、二百二十日以上の九つである。

(13) 山田龍雄など、『日本農業全書 第13巻・農業全書』。農山漁村文化協会、1978、P20。

(14) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』。農山漁村文化協会、1978、P191。

(15) 山田龍雄など、『日本農業全書 第17巻・百姓伝記』。農山漁村文化協会、1979、P347。

ないと、一年中ひたすら忙しく働き、生計に迫られて発展することができない。もちろん、農民は農時を積極的に利用して、どの時点も見逃すことなく、生産の絶好の機会を逃すことがないようにする。「抑事を前に定る工夫ハ、農事にハ限らねども、農人ハ取分心を用ゆべし」⁽¹⁶⁾と示したように、仕事を行う前に、その手順を決めることも大切なことである。きちんとした計画がなければ、一度生産の好機を逃すと、農業生産の順序が完全に乱れ、逆行してしまい、結果的に貧困に陥り、自給自足が難しく、困難な状況に陥ることになる。これはつまり、農業生産において、農時を誤らない限り、高収穫の農業を達成し、欠食や貧困に苦しむことはないということである。逆に、農時を重視せず、農時を誤ると、一年中労働してもほとんど収穫がないままとなる。

(二)「天」——農業の源

古今東西、人類にとって「天」は常に最も関心のある対象の一つである。全ての人はその領域の下で生活し、人々は「天」の全貌を窺い知ることが難しく、いわゆる「天」は神秘的な色彩で包まれている。近世に至ると、人々の知識が発展し、自然と人間、およびさまざまな自然現象との関係について思考することが可能になった。しかし、人々が直面する未知の領域は依然として広く、これらの未知の事柄に直面する際、人々は心の中で考えたことを代替するために虚構のものを作り、未知の空白を想像力で埋めるしかなかった。

考古学又は歴史学の視点では、日本の稲作の起源はいろいろな説が出されてきた。その中でも、渡辺忠世の「アツサム・雲南説」、中尾佐助の「東亜半月弧説」などがある。しかし、虚構の視点では農業の起源はまた違ってくる。例えば、木村茂光氏によると、『日本書紀』巻一〈神代上〉第十一では「陸田種子」と「水田種子」の神話が存在する。またその一方、『日本書紀』巻二〈神代下〉第二では「斎庭の穂」という神話があり、『常陸風土記』行方郡条では「耕地開発」を示す「夜刀神」に関する神話もある。⁽¹⁷⁾

農業というものはどのようにして生まれたのだろうか。『農事総論』の冒頭で「稼を生ずる物ハ天也。是を養ふものハ地なり」⁽¹⁸⁾としており、「稼」という言葉

(16) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P18。

(17) 木村茂光、『日本農業史』、吉川弘文館、2010、P40-46。

(18) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P46。

は穀物を植える意味で、作物の意味でもある。作物を植えることは農業である。ここで示したように、宮崎安貞は、この世で農耕を生み出すものが「天」であり、そして人々は天からもらった作物を地で耕すことが農業と定義した。

人間は「天」から作物をもらうので、人間そのものが自然に農業を扱う能力を持っている。しかし「天の気により、土地の宜きに順ひ、時を以て耕作をつとむ。もし其勤なくハ、天地の生養も遂べからず」⁽¹⁹⁾と示したように、もし人間が気候・風土に応じず、季節に従わず、農業をおこたると、天地の作物を生み出す力もなくなる。「天万物を生ずる中に、人より貴きハなし。」⁽²⁰⁾「天」は農業を生み出すだけでなく、人間を含む万物をはらんだ。しかしその万物の中に最も尊いものは人間である。「天地の人を育ために儲たる穀物を、事ゆへもなく刈収めぬるハ、有難き仕合なりと、丹誠を尽して祝悦び樂むべし。」⁽²¹⁾穀物は、「天」が人間の繁栄を円滑にするために作り出したものであるほど、「天」は人間を愛しているのである。「人の貴き故ハ、則天の心をうけ継て、天下の万物をめぐミ、やしなふ心、をのづからそなはれるを以てなり」⁽²²⁾、人間は最も尊い理由として、天の心を受け継いで、あらゆる作物を育てる能力が自然にそなわっているからである。

また農業生産の過程で、肥料が重要である。『農業全書』では「農業の内にも、取分此糞壤を調ずるを以て肝要とすべし。されバ心あらん農夫ハ此理りを深く思ひ、此に心を留め眼を付て、慎んでよく其事をつとめざらんや」⁽²³⁾つまり、農業の中で、良い肥料を準備することが大事なのである。「天」は万物を生じ育てるために、世の中を豊かにするために、作物の成長に役たつ肥料という方法さえも創造した。

「夫人事の誠により、天地の感応ある事ハ、形に影のしたがひ、声にひゞきの応ずるがごとく速なる事なれば」⁽²⁴⁾、影と形に従い、こだまが声に応ずるように、「天」は速やかに人間の心に応じてくれる。「これ誠に天道にさかふ理りにて、災を招く道なり」⁽²⁵⁾「天」はそうした重要なものであるので、これに違反することは

(19) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P46。

(20) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P47。

(21) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P110。

(22) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P47。

(23) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P104。

(24) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P110。

(25) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P110。

災いを招くことになる。徳永光俊氏はこの現象を「まわし」という和語で表現している。つまり「天」は「人」の気持ちにに応じてくれるのであり、稲がよい芽を育ててくれることを心の中で祈れば、稲も人の心を感じて育つのである。⁽²⁶⁾

古代哲学の中の「天」は、哲学者によって異なる意味を含んでいる。おおまかに言えば、天というものには三つの意味がある。一つは最も高い主宰者を指し、二つは広い自然を指し、三つは最高の原理を指す。『農業全書』における「天」の説明からは、宮崎安貞の考える「天」が最高支配者の意味だけでなく、自然の「地」と相互補完な関係をもつ自然の「天」の意味も含まれていることが分かる。「天」は万物、人を含むものを育む支配者であり、人は「天」によって創造された最も尊い存在であり、人類の継続のために「天」は農業を創造し、農業生産に必要なものをも創造した。徳永光俊の指摘するとおり、『農業全書』の大麦に関する部分には、人々が土地の神を通じて農作物と交流する例も挙げられる。⁽²⁷⁾ また農民は「天」から気候、農時を観察することによって、四季・八節・二十四節を利用して、農業生産に時間的な保証を提供できる。「天」は宮崎安貞が提唱する農業の合理性の解釈となる。農業社会という現象の背後には非合理的な「天」が存在する。近世農業社会を成り立つ基礎として、合理的現象の背後に「天」という非合理的感情が存在し、非合理的な「天」こそは表層として合理的現象を支えている。

二、「地」

三才論は一つのシステムであり、それを単純に分割することはできず、相互に繋がっている。地には人間の生活資源や生産資源となる動物・植物資源や鉱物資源などが含まれていて、また農作物の生育の媒介でもあり、したがって富の源泉となることである。農業生産においては、「天時に従う」だけでなく、「地利を量る」必要もある。これによって自然を正しく利用し、さらには自然を変革し、物質生産を実現することができる。

前述したように、『農業全書』の冒頭では「是を養ふものハ地なり」という言葉があり、つまり作物を育てるのは「地」という考え方である。「田畠其外、土地の

(26) 徳永光俊、『日本農法の心土：まわし・ならし・合わせ』。農山漁村文化協会，2019，P35。

(27) 徳永光俊，「江戸農書にみる日本農法」、『農業史研』38（0），2004，P10-14。

善悪、所の高下遠近品々あり」⁽²⁸⁾とあるように、土地には、土質の良否、高い所にあるか低い所にあるか、家から遠いか近いかなど、色々な違いが存在する。そのため、「能是をわきまへ、其利分を考へ」⁽²⁹⁾るべきだとしている。そうしなければ、「勝手のよき相応の物を作らざれば妄りに人の力を尽しても、利潤を得る事少し」⁽³⁰⁾となる。天時に従うという考え方の指導の下で、農民の生計は地の利によって解決され、社会の安定を維持することができる。

宮崎安貞は、土壌を分析することによって、土地の良し悪しによって作物を植えると考えている。「黒墳ハ麦に宜しとて、麦の類ハ黒土の性のよき肥たるを好む物なり。赤土ハ豆に宜しとて、豆の類ハ赤土を好むとしるべし。粟黍ハ、黄白土の肥良に宜し。・・・大根ハ細軟なる沙土に宜し。芋ハ水に近き肥柔かなる日かげを好むものなり」⁽³¹⁾麦類は黒土のような質の良い肥沃な土を好む。赤土は大豆に良いとされ、豆類は赤土に適している。粟・黍は肥えた黄白土に適している。大根はやわらかい砂に適している。里芋は水に近い肥沃で柔らかい土地で育ち、日陰を好む。また「又菓樹の類ハ南向の深く肥たる地、取分やしき廻りに宜し」⁽³²⁾という果樹類の土壌適応に関する説明もある。徐光啓の「黄白土宜禾、黒墳宜麦与黍、赤土宜寂、汚泉宜稻」⁽³³⁾が示したように、『農政全書』でも似ている言葉があるが、宮崎安貞は『農政全書』の内容をそのまま引用するのではなく、近世農業の現状に合わせて、大根・里芋などの作物の土壌適応の説明を加えた。特に黒土と黄土は「耕しこなすにハ土ばらつきて、牛馬のちからつゝいゝず、麦、木綿其外何様の物を作りてもきらひなく、其土ハ黄色、又ハ黒土にても、重くして、さハやかなるハ、上々の土なり」⁽³⁴⁾とし、牛馬の力もあまり使わずに作業が進み、重くてしかも粘りつかない上等の土としている。

では、どのように土地の良し悪しを分別するか。宮崎安貞はいくつかの基準をまとめた。「又土地を見るに多くの目付あり。先陰陽を見分、草木の盛長と、色とを見、又石の色、同土の軽重、ねばると、もろきを見、日向のよしあし、雨霧

(28) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P73。

(29) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P73-74。

(30) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P74。

(31) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P75。

(32) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P76。

(33) (明) 徐光啓、《农政全书》、石声汉校注、《农政全书校注》、上海古籍出版社、1979、P145。

(34) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P74。

風霜、又ハ地の浅深と、糞しを取所の道路の遠近、都邑の運送、海河船つきの便、牛馬の草飼等に至るまで、闕る事なきを上々の村里と云べし。此内かくることの多少を以て、段々上中下の位を、はかり定むべし」⁽³⁵⁾ まず最初に土地の「陰陽」を見分けることである。ここでの「陰陽」は土地の乾・湿の程度を指す。次に、この土地における草木の成長状況や植物の色を観察することである。さらに、土壤の軽さ、粘り、土のかたまりの大きさ、日照り状況などを観察することである。また、雨や霧、風、霜などの天候による土壤の変化も考慮する。土地だけでなく、家から畑までの距離、肥料を畑まで運ぶ距離、作物を村に運ぶ距離、近くの牛や馬の数なども考慮しなければならない。そして土地を上中下の三つに分け、これらの条件に合致するほど、その土地は上等と見なされる。

しかし、土地の等級は一定のものではない。「又曰上々と下々との土ハ、人のちから及はざる物也（上々の土を下に変じがたく、又下々の土を上にも転じがたきなり。）」。⁽³⁶⁾ 最上級と最下級の土は人力で変えられにくいとされているが、「其間、中下の土におゐてハ、悪土を肥土となし、弱土を強土とし、堅きを和らかにし、埴きを脆くし、浅きを深くし、かるきを引しむるなどハ、漸く人のちからにて、変じかゆる事」⁽³⁷⁾ その間の中級、下級の土なら、人力で徐々に改良できるものである。

土地の生産力を最大限に引き出すには、客観的な自然ルールを尊重し、自然の時期に従って農業生産活動を行うだけでなく、「養地」も重要である。養地とは、土壤の肥沃性を維持し向上させ、地力を維持するために一連の手段を講じることを指す。養地を行う理由は、作物の成長過程で失われる栄養分を適時に補充しない場合、土壤の肥沃性が徐々に低下し、作物の収量と品質に影響を与える可能性があるためである。「又田畠八年々にかへ、地をやすめて作るをけいよしとす」⁽³⁸⁾ と土地を休ませながら耕すべきことを強調した。宮崎はそれまでの老農の知識を学んだり、自分で実験したりして、いろいろな作物の生産の習性を比較して、輪作の方法を考え出した。「所により水田を一、二年も畠となし作れば、土の気、転じてさかんになり、草生せず虫気もなく、実のり一倍もある物なり。凡此田を

(35) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P75。

(36) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P77。

(37) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P77。

(38) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P48。

畠になしたる地ハ、物よく生長するものなり。さればよく土にあひて、価高き畠物をうへて、厚利を得べし」⁽³⁹⁾。水田を一年二年畑にして耕作すれば、これにより、土の性質が変わって、地力がよくなり、雑草もなくて害虫もなくなる。「夫陰陽の理りハ至て深しといへども、耕作に用ゆる所ハ、其心を付ぬればさとりやすし」⁽⁴⁰⁾と、宮崎安貞はまた、水田と旱田の間の切り替えを理解するために陰陽のバランスの原理を利用した。旱田は「陽」を代表し、水田は「陰」を代表する。長い間旱田を使用し続けると、「陽気」が増加し、「陽気」の増加は地力の低下を引き起こし、それにより収穫が減少する。したがって、田地の「陰気」を増やすために旱田を水田に切り替える必要があり、このとき増加する「陰気」は元の「陽気」と調和し、陰陽のバランスが取れた状態に達する。

土地の効力を発揮するには時期を正しく把握することが不可欠であり、天の時に順ずるという前提の下で、土地の効力を最大限に発揮することができるのである。耕地の時期については、「さて春の耕しハ、冬至（十一月ノ中）より五十五に当る時分、菖蒲の初てめだつを見て耕し始る物なり」⁽⁴¹⁾「又夏至（五月中）ハ天氣始て暑し。・・・又夏至の後九十日、昼夜ひとし、・・・凡此等の時を以て、田畠を耕せば、一度にして五度にも当るものなり。土のうるほひ和らぐ時なり。皆これ耕してすぐれてよき時なり」⁽⁴²⁾「又秋の耕しハ、白背を待て勞すとて、畦の高き所白く干たる時かくべし」⁽⁴³⁾と、耕地の適切な時期に応じて、春耕、夏耕、秋耕それぞれの適切な時期を指摘していた。春は、万物が復活し、凍結が解け、地気が始まり、土壌が柔くなり始め、農業生産活動に適した季節である。たとえば、春小麦の耕作、樹木の植樹などは、この時期に行う。夏至を過ぎると、陰陽の二気のうちの陰気が盛んになり、土地は再び和らいだ状態となり、植物の生育に適した時期である。秋耕は、土地が十分に乾燥するのを待つ必要があり、そうでないと土塊ができやすく、地力が低くなる。総じて言えば「又曰耕の本ハ時を考へて、土を和らぐるを肝要とする事也。」⁽⁴⁴⁾ということである。

宮崎安貞は、「天」利用が第一であり、土地の利用が第二であると考えている。

(39) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P48。

(40) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P48。

(41) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P51。

(42) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P54。

(43) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P52。

(44) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P53。

天の働きを理解することで、天の指導のもとで土地の価値を十分に発揮することができる。土地の利用では、用地と「養地」（地力の維持）の矛盾をうまく処理する必要がある。なぜなら、用地は重要だが、地力の維持はそれ以上に重要なことであり、用地と地力の維持を結びつけることこそ、土地の利用効果を最大限に引き出すことができるからである。

三、「人」

三才思想は、物事を一つのシステムとして思考する考え方であり、その各要素が有機的に結びついていて、切り離せないものである。簡単に言えば、天の時を尊重し、地の利を重視し、人の主観的な能動性を発揮することが求められる。近世日本の農学者は農業技術を探求すると同時に、常に人間的要素を考慮しなければならなかった。『農業全書』巻一農事総論の冒頭では「稼を生ずる物ハ天也。是を養うものハ地なり。人ハ中にゐて、天の気により、土地の宜きに順ひ、時を以て耕作をつとむ」⁽⁴⁵⁾という言葉が書かれている。作者は、田畑を耕すことが簡単な仕事ではなく、だれでもできるものではないことを人々に伝えたいと考えている。人々は農業生産の過程で自然の法則に従い、天の道や地の利、そして農作物の生育の法則を尊重しなければならず、自然界と生物有機体との問題を正しく取り扱うことで、農業の高収穫を得ることができる。

天・地・人の三才のうち、人間は農業生産において最も重要な要素であり、人間の要素はまた「人和」と「人力」で構成され、人和は道德によって維持される必要があり、人力はまた知力と体力の二つの部分を含んでいると考えている。

（一）人和

「人和」とはどのようなものだろうか。『デジタル大辞泉』から見れば、「和」は性質の違うものがいっしょにとけ合うという混和・中和・調和の意味がある。人間は、「天」と「地」の機能を統合し、融合させて農業に応用することである。「人」は集団・グループとして扱われる。それは人の自然的な要素だけでなく、人の社会的な要素もあり、あらゆる社会関係を調整することで人間の集団の力を最大限

(45) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P46。

に農業に引き出すこととしてを理解できる。

『農業全書』ではまず王と民の和が見られる。「こゝを以て、上古の聖王より、後代賢知の君に至り、天子ミづから大臣をひきいて、春の始田に出て、手づから農具を取、田を犁初給ふ事あり。是を藉田と云て、政の初とし給へり」⁽⁴⁶⁾。「藉田」は古代中国に由来し、天子が農民の力を動員して耕作する田地を指す。春耕の前になると、天子は自ら藉田し、農業への重視を示す。これは国の基本方針として農業を重視するものである。「藉田」は農業の正統な地位を確立する効果を持っている。⁽⁴⁷⁾江戸時代は封建社会であり、君主と農民、武士と商人の間には明確な社会的な分業が存在していったが、宮崎安貞は君主や武士が「藉田」の礼を学び、君臣と農民が共に土地を耕すことで、基本的な重農の認識を強化することを望んでいた。

このほか、人間の道德について、宮崎安貞は特に蓄積・儉約の思想を強調した。蓄積・儉約が、経済上の概念であると理解されるのは一般的であり、日本史を通してみると、支配階級の立場から儉約を旨とする時代は常々見られるが宮崎安貞のいう儉約は異なる意味がある。この部分は主に『農業全書』巻一農事総論第九・蓄積付儉約に見られる。『農業全書』では、「貴賤共に、其歳ごとに得る所の分量を以て四つに分ち、其一分を余し、不慮の変を救ふ備とし、残る三分を以て、其年の渡世をいとなみ・・・」⁽⁴⁸⁾と説いた。「儉約」には、現代と同じく「節約」、詳しく言えば三年耕作すれば、必ず一年分の食料を残すという蓄積をするという意味が含まれている。「夫農家にかぎりて、富る者ハまれにして、貧しきものハおほし。かねてより、財穀を蓄へざれば、凶年にあひて、飢をまぬかれ難し。つねに身持を謙り、儉約を守りて、此計を専とすべし」⁽⁴⁹⁾と言われるように、農業に携わる者はほとんどと貧しい人間であるので、財産も穀も蓄えておかなければならない。そうしないと、凶年になったら飢饉から逃れることは難しい、予測のできない災いを防ぎ、非常時にうまく対応できない。これは蓄積・儉約の思想を主張する理由である。

さらに明君は五穀を尊んで、金などを卑しむべきだと思っている。なぜなら、

(46) 山田龍雄など。『日本農業全書 第12巻・農業全書』。農山漁村文化協会、1978、P46。

(47) 彭兆栄。君儀田方——古代天子藉田礼之人类学研究[J]。学术界、2019、(09)、P78-86。

(48) 山田龍雄など。『日本農業全書 第12巻・農業全書』。農山漁村文化協会、1978、P115。

(49) 山田龍雄など。『日本農業全書 第12巻・農業全書』。農山漁村文化協会、1978、P113。.

金銀などは、飢饉になっても食べられない、寒い時は着ることができないからである。毎年蓄積・儉約の思想に従って、身分の上下にかかわらず全ての人がそれを守るならば、「普く富をかさね、上に国用の不足なく、をのづから下民をめぐむにたり・・・」、農民は「下民又其法にうけ順ハズ、たとひ凶年にあふといふとも、飢寒に苦む事なかるべし」。苦しいことなく、また国の君主にとっては、「殊更国家の主として、国に此蓄なきハ、国其国にあらずともいへり」⁽⁵⁰⁾。国が蓄積にとって真の国になる。これは「人間の世にてハ、第一の勤にして、上なき肝要の法なり」⁽⁵¹⁾とのことである。

安貞は、また世の中には強欲な人々も存在すると考えている。このような人々は金銀や米をむさばるように蓄えることしか知らず、それを使うことはせず、親戚や友人が災害に遭っても手を差し伸べない。彼らは仁慈・慈悲の心を持たず、無限の欲望だけがある。安貞によれば、このような人々は動物であり、人間ではない「守銭奴」に値すると考えている。「儉約と吝嗇との差別を、我身によくわきまへて用捨し」⁽⁵²⁾これはケチであり、彼の主張する「儉約」とは大きく異なる。「且奢と吝とハ、是天の咎人なりと云事を、よく知べし」⁽⁵³⁾が言われるように、贅沢もケチも天地自然に背く罪だと考えている。

このように、宮崎安貞は儉約の必要性を訴え、その道徳的価値を高く評価している。儉約は家業維持の要諦として農民の間に広がっているが、安貞によって、よりいっそう内容が拡大され、生活倫理にとどまることなく、農業道徳まで高められた。

(二) 人力

人は何をもって農業に携わるのだろうか。人は農業を扱うとき、まず力を使う。「又一人耕して八十人はを食する分数ある事なれば、農業をつとむる人ハ、心力を尽してはげむべし。」⁽⁵⁴⁾が示したように、農業に携わる者は、心と力を尽くして励まなければならないのである。「力」には体力 (physical strength) も含まれるが、体力だけでなく、「心」、つまり知力 (Intelligence) も重要な要素である。

(50) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P115-116。

(51) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P117-118。

(52) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P119。

(53) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P119。

(54) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P47。

農業生産はまず肉体労働であり、肉体労働は農業労働者に対する基本的な要求である。「力」は農業生産では畑を耕したり、種をまいたりといった具体的な農業活動という形で現れる。農民が農業に対して投入する労力は、時間的にも長短がある。「・・・正直を専にし、怠りなく、力むれば、其ほど々

に随ひ、福を得ること疑所にあらず」⁽⁵⁵⁾ 安貞は時間をかければかけるほど、よりよい収穫が得られると考える。そして農業労働者の体力の強弱よりも、怠らない勤勉さが大切であることが見られる。また勤勉に関連するものは忍耐力である。忍耐力のない人は仕事もいつも途中で挫折し、不安定である。作物は春に生まれ、夏に成長し、秋に収穫される必要がある。これは日本人の勤勉さの一つの表れでもある。

勤勉の目的は農業の多産にある。現実的な状況から見れば、同じ程度の勤勉でも、収穫は必ずしも同じではない。なぜなら、農業に対する労働の投入は時間の長短だけでなく、他にも多くの要因が収穫に重要な影響を与えるからである。多く働けば多くを得るという前提のもとで、より少ない労働力でより大きな利益を得る方法は、農業分野で追求されている目標の一つであり、すなわち「力少なき収穫多き」、つまり農業生産率の向上が求められている。例えば、「又夏至（五月中）ハ天氣始て暑し。・・・又夏至の後九十日、昼夜ひとし。・・・凡此等の時を以て、田畠を耕せば、一度にして五度にも当るものなり。・・・」⁽⁵⁶⁾ と示されるように、多く働けば多くを得るけど、少し働いて多くを得ることも重要なことである。

何を持って、農業を尽くすのか。まず頭に浮かぶのは農業に使われている道具であろう。孔子も曰く「工欲善其事、必先利其器」、大工がよい仕事をしようとするれば、まず道具をよく整えておかねばならない。江戸時代において、軽便な人力耕耘具の改良も非常に顕著な地域性を持ち、農具の改良は農業のさらなる集約化を促進した⁽⁵⁷⁾。『農業全書』では「牛馬のちから弱くして、農具の類あしければ、農人精力を尽すといへども、仕事のしるしハなき物なり。⁽⁵⁸⁾」と述べている。牛馬の力が弱ければ、あるいは農具の質が悪ければ、どんなに努力したと

(55) 山田龍雄など。『日本農業全書 第12巻・農業全書』。農山漁村文化協会、1978、P110。

(56) 山田龍雄など。『日本農業全書 第12巻・農業全書』。農山漁村文化協会、1978、P54。

(57) [日] 杉本勲 編、鄭彭年 译。『日本科学史』。商务印书馆、1999、P147。

(58) 山田龍雄など。『日本農業全書 第12巻・農業全書』。農山漁村文化協会、1978、P51。

しても成果がでないと述べる。「惣じて農具をゑらび、それ々の土地に随て宜きを用ゆべし。凡農器の刃、はやきとにぶきとにより、其功をなす所、遅速甚違ふ事なれども」⁽⁵⁹⁾。農具というのは鋭いものと鈍いものがあり、耕作においては、それぞれの土地にあう農具を選ぶことが大切であり、これにより作業の効率が大きく違いがある。そのため、農民はその財力の範囲内で、できるだけ良い農具を使うべきだと考えている。

おわりに

『農業全書』を分析してみると、『農業全書』の「天」には二つの意味があることがわかる。第一は「授時」である。時序、天時とも言える。農業生産の視点から「天時」を考えると、これは「農時」と呼ばれることになった。宮崎安貞は、農業生産における天時や天候の影響に非常に注目し、どのような季節や天候条件でも、それに対応して農業活動を行うべきだと考えている。農時を逃すと収穫が減少したり、収穫がなくなったり、それが貧困につながる可能性があるとして述べている。また、彼は農業の季節を表すために「雑節」の暦を活用している。これは宮崎安貞のオリジナリティとも言える。さらに、「天」には神秘的な色彩があり、万物の源であり、人間の源であり、農業の源でもあると考えている。したがって、農業活動では「天」の意志に従わなければならない、それに反すると作物の発育不良や収穫不振につながる可能性があるとして信じている。

次は「地」の思想である。農業生産においては、「天時に従う」だけでなく、「地利を量る」必要もある。これによって自然を正しく利用し、さらには自然を変革し、物質生産を実現することができる。宮崎安貞は、土地の質は良いものも悪いものもあると考えていて、土壌の色、日照量、交通の利便性、肥料の施しやすさなど、多くの条件に基づいて土地が多くの等級に分かれると述べている。さらに、宮崎安貞は「養地」にも非常に重視していて、土壌の肥沃性を維持するためにさまざまな手段を取ることを提唱している。それで、彼は陰陽の調和を通じて「養地」を行うことを主張した。

最後は「人」に対する考え方である。三才思想において、人は主に二つの意味

(59) 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』、農山漁村文化協会、1978、P67。

を持っている。まず第一に、農民に対する道徳的要求、すなわち「人和」である。農民は農業活動をより良く行うために、他の人と「和」の道徳を保つ必要がある。次に、「人力」を指す。これには体力と知力が含まれる。体力は言うまでもなく農業生産において最も基本的な要求である。その一方、知力は主に農具という形で現れる。農具も当時の農業生産技術の水準の直接的な表れであり、江戸時代の農具を見ると、水田用の農具、旱田用の農具、その他の種類の農具ともに、多様性と効率の高さでよく知られている。江戸時代の農具の発展は、近代農業の構図と基盤を築いた。

参考文献

- 山田龍雄など、『日本農業全書 第12巻・農業全書』。農山村文化協会，1978。
- 楊直民，《农学思想史》。湖南教育出版社，2006。
- 国立天文台（2023）。「雑節とは？」。 <https://eco.mtk.nao.ac.jp/koyomi/wiki/B5A8C0E12FBBA8C0E1A4C8A4CFA1A9.html>。（参考日：2024年2月1日）
- 山田龍雄など、『日本農業全書 第13巻・農業全書』。農山漁村文化協会，1978。
- 山田龍雄など、『日本農業全書 第17巻・百姓伝記』。農山漁村文化協会，1979。
- 徳永光俊、『日本農法の心土：まわし・ならし・合わせ』。農山漁村文化協会，2019。
- 徳永光俊。「江戸農書にみる日本農法」、『農業史研』38（0），2004。
- （明）徐光启，《农政全书》。石声汉校注，《农政全书校注》，上海古籍出版社，1979。
- 彭兆荣，君仪田方——古代天子藉田礼之人类学研究[J]，学术界，2019，（09）。
- [日] 杉本勋 编，郑彭年 译，《日本科学史》，商务印书馆，1999。